

# 厚生省母子相互作用の臨床応用に関する研究班

## 昭和59年度総括研究報告書

班長 小林 登（国立小児病院小児医療研究センター）

母子相互作用の意義は、本研究班の研究の結果明らかにされたが、母子関係、父子関係、家庭基盤、育児問題などの面で社会的にも多くの問題が生じており、母子相互作用の臨床的応用の重要性は増々強まっている。

本研究班は昭和60年度も昨年度に引続き、産科学、小児科学、精神科学、耳鼻咽喉科学、心理学、教育学、育児学、行動科学、文化人類学、看護学、工学などの領域から60名の専門家に研究協力者として参加を求め、母子相互作用の臨床応用につき研究を行なった。

本年度は次の6項目のプロジェクトを組み研究を行なった。

### プロジェクトⅠ：動物行動学的研究

本プロジェクトは動物行動の研究を通じて母子相互作用の臨床上の意義を明らかにするもので、本年度は、ニホンザル、チンパンジー、犬などの育児行動、集団の中での発育の特徴などの研究を行なうことにより、人間社会における小児の心身の発育に及ぼす母子相互作用の意義を明らかにした。

### プロジェクトⅡ：周産期学的研究

超音波を用いて胎児の行動や母子相互作用の研究が行なわれ、胎児発育に伴う胎児の行動の特徴が明らかにされた。胎児は子宮内において、早期から胎児の意志に従っていると考えられる行動がみられ、胎児にとっても妊婦にとっても出生前の母子相互作用が重要であることがこれらの研究や内分泌学的研究および妊婦の生活環境の胎児への影響などの研究から明らかになった。

このほか、新生児の行動の特徴や能力、未熟児哺育上の母子相互作用の臨床応用ならびに、出生後早期の母児接触の意義などが明らかにされ、また、日米の新生児の特徴が比較検討された。

### プロジェクトⅢ：発達心理学・行動科学的研究

乳幼児の心理・行動の発達と母子、父子関係が研究され、乳幼児の発達環境としての両親や周囲の人々の育児観や発達期待についての研究と、両親の育児行動の児の発達に及ぼす影響の研究より、両親の育児行動が児に及ぼす影響が大きいことが明らかにされた。また母子分離や集団構造が児の発達に大きな影響を与えていることや小児の生活環境や保育要因が児の発達に効果を及ぼしていることなどから、母子相互作用が臨床的に重要であることが示された。母子相互作用の障害の臨床例として児童虐待、神経性食思不振症、夜尿症などの研究も行なわれた。

### プロジェクトⅣ：小児科学・臨床心理学的研究

心身障害児における母子関係、父子関係の特徴や、小児心身症、行動異常児における親子関係、父親像などが研究され、小児科学や臨床心理学における臨床上の母子相互作用の意義が明らかにされた。

#### プロジェクトV：社会小児科・文化人類学的研究

現代の主婦の育児行動や母親の育児不安などについての研究が行なわれ、また共働き育児における乳幼児期の保育形態の影響についても研究され、育児行動には母親自体の保育状況の影響も大きいことが明らかにされた。また児の異常が母親の心理状態に及ぼす影響が大きく、検診で児の異常が指摘された場合には、軽度の異常であってもきわめて大きな影響を与えることも明らかになった。

親子関係や家庭基盤、子供の育て方などについての地域や民族の特徴なども文化人類学的に研究された。

#### プロジェクトVI：育児家庭基盤などの実態に関する調査・疫学的研究

わが国の育児の実態をアンケートにより調査するとともに、育児障害の結果生じると考えられる「被虐待児症候群」および新生児を自宅に引きとらない「置きざり赤ちゃん症候群」の実態調査が行なわれ、わが国においても、このような事例は発生しており、今後社会的にも大きな問題になる可能性が示された。

各プロジェクトにおける研究者の個々の研究成果は添付する報告書に詳述されているところであるが、これらの研究結果は本年度の2回の研究班総会にて発表され、母子相互作用の臨床応用をいかにすべきかについての検討が行なわれた。研究協力者が各々の研究分野における専門家の立場で研究を行ないながら、研究班という共通の場で討論を行ない問題を解決するという当研究班の研究方法は、本年度も十分に成果をあげた。

母子相互作用の臨床的応用に関しては、産科、小児科、精神科、その他の臨床医学の分野のみでなく、心理、教育、育児などの専門家や一般の人々からその成果についての関心がきわめて大きいので、今後更に研究を続け、次年度に3年間の研究成果をまとめて発表する予定である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



母子相互作用の意義は、本研究班の研究の結果明らかにされたが、母子関係、父子関係、家庭基盤、育児問題などの面で社会的にも多くの問題が生じており、母子相互作用の臨床的応用の重要性は増々強まっている。

本研究班は昭和60年度も昨年度に引続き、産科学、小児科学、精神科学、耳鼻咽喉科学、心理学、教育学、育児学、行動科学、文化人類学、看護学、工学などの領域から60名の専門家に研究協力者として参加を求め、母子相互作用の臨床応用につき研究を行なった。

本年度は次の6項目のプロジェクトを組み研究を行なった。